

協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業
平成28年度 成果報告書

目 次

1	学長あいさつ	1
2	室長あいさつ	2
3	山形大学COC ⁺ 事業の概要	3
4	COC ⁺ 事業の取組と成果	8
	・教育プログラム開発委員会の開催	8
	・協働人材育成部会の開催状況	10
	・COC ⁺ シンポジウムの開催	13

1 学長あいさつ

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC⁺）の推進に向けて

山形大学長・事業推進代表者 小山 清人

平成 25 年度に採択を受けた文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」では、山形県内の各地域が抱える様々な課題、少子化に伴う諸問題の解決に取り組む人材を育成することを地域貢献の支柱と捉え、学生の地域理解の増進に取り組みました。

平成 27 年度には、COC 事業をさらに加速させるため、若者の山形県内への定着を目的とする協働・循環型「やまがた創生」人材事業が『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業』（COC⁺事業）として採択されました。

この事業は、大学・自治体・企業・NPOなどが連携して山形に就職し地域の課題解決を担う地方創生に資する人材を育成し、産学金連携による共同研究等を促進して新産業を創出する等により企業雇用の拡大を図り、山形の活性化を目指したものであります。

こうした中、この事業の事業協働機関であります、山形県、山形市を初めとする県内 14 自治体、山形県商工会議所連合会等経済 7 団体並びに山形県立米沢栄養大学等 6 高等教育機関の代表者で構成する「やまがた創生戦略協議会」を開催しまして、地域に根差した教育改革を含めた総合的な地方創生戦略を積極的に展開することにいたしました。

山形大学は、これまでのCOC事業を加速度的に発展させた本事業の取組みを通して、県内の各地域等との連携を更に深めて、学生の地域定着や新たな雇用の創出を紡ぎ、産み出すよう取り組んでまいりますので、今後とも、より一層のご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



2 室長あいさつ

若者の地域定着の向上と雇用創出を目指して

山形大学COC+推進室長
山形大学理事・副学長 大場好弘

山形県が抱える様々な課題、特に少子高齢化社会がもたらす諸問題の解決に取り組む人材を育成することが急務となっています。これらに取り組むために山形大学ではCOC事業を平成25年から地域貢献の柱と捉え、地域志向科目の増加と地域志向の研究・社会貢献事業の展開により、学生の地域理解の増進に取り組んで参りました。

平成27年度に採択されたCOC+事業は、県内の高等教育機関、自治体、企業、経済団体、NPO等と連携組織を構築して山形県をあげて課題解決の明確化と具体的な解決策の策定、実行を行うものであります。具体的には、地域連携科目の必修化、学外研修科目（インターンシップなど）と課題解決科目、協働研究科目（卒業研究や修士特別研究）による学生の地域理解の増進と主体的な課題解決人材の育成により、山形県内への就職人数の増加を図ることを第一目標としており、卒業生の地元就職率の10%向上を目標としています。更には新たな雇用創出を目的として、ベンチャー企業等による新規雇用150人の創出も目標として掲げています。あくまでもこれは数値的な目標であり、最終的には多くの若者が自ら地域の課題を正確に理解し、解決策を策定、実行していく逞しい人材に育つことにあります。逞しい若者が年齢や性別を超えて多くの人々を巻き込んで地域の活性化に取り組み、その結果として、山形県での若者の地域定着率の向上と新規雇用創出が継続的に生み出される社会へと転換することです。その基盤を形成することが今回のCOC+事業に参画する大学や自治体、NPO等の組織の皆様へ課された課題であり、同じ方向に向かって意識を共有し、継続的に取り組む事が求められています。過去と現在では変えられないが、未来の山形県の姿は変えることが出来ます。前向きに、真摯にこの事業に取り組みましょう。皆様の積極的なご参加とご協力を心よりお願い申し上げます。



3 山形大学COC+事業の概要

山形県は、47 都道府県の中で、三世帯同居率 1 位、社長輩出率 2 位という、働きやすく、事業継承・起業をしやすい環境にあります。ところが人口減少率はワースト 5 位、高齢化率もワースト 5 位という、全国で 5 本の指に入る人口減少県です。人口減少の主要因は、若年層に集中した県外流出にあります。過去 5 年間の山形県人口の社会減 11,895 人のうち 20-24 歳人口の社会減は 6,490 人で、その過半数を占めます。若年層の転出で山形の経済・社会の空洞化が進むだけでなく、出生率の低い東京圏への人口集中によって日本全体の人口減少に拍車がかかります。また、政治・経済・文化の拠点が国内に一つしかない東京一極集中社会は、今後のグローバル化する世界との競争において不利であり、大災害などのリスクに対しても脆弱です。

そこで、山形県内の各大学等では、学生の地域への関心を高める地域志向科目の充実を図り、学生の地域定着を目指してきました。平成 24 年度開始の「大学間連携共同教育推進事業」では山形大学の 2 事業が採択され、県内外の高等教育機関が協力して学生たちに山形の自然・歴史・文化を学ばせる教育プログラムを構築してきました。平成 25 年度開始の「地（知）の拠点整備事業」には山形県内から 3 校（山形大学、東北公益文科大学、東北芸術工科大学）が採択され、地域志向科目の拡充に取り組んできました。しかし、そうした教育改革にも関わらず、若年層の県外流出は止まっていません。例えば平成 26 年度の山形大学卒業生のなかで、山形県内へ就職した者の全就職者に占める比率は約 25%です。若年層の県外流出を押しとどめるためには、地域志向科目の拡充だけでは不十分なのです。

そこで本事業はコーディネーターを活用して、一群の教育科目の開発・整備を行いつつ、その母体となる協働人材育成部会を県内全域に展開して、オール山形の体制で地域に貢献する人材の育成と地方創生事業を推進していきます。

対策 1：学外研修科目の開発・整備

卒業生の多くが就職時に県外流出する一つ目の要因は、学生と職場のマッチングができていないことです。現状では、多くの県内企業が人材不足で悩んでいます。また、山形県は人口当たり社長率が長らく 1 位（2014 年度は 2 位）で、事業継承者及び起業家が多い環境でもあります。しかし多くの学生が、県内の職場や事業経営の風土への関心を持たないまま卒業を迎えています。就職時の県外流出を抑制するために、学生たちが地域の職場と早期から関わりを持ち、自分たちが地域経済を担うというビジョンを抱く教育改革を進める必要があります。

そこで企業などでのインターンシップが主体となる学外研修科目を開発・整備します。地域と大学のこれまでの連携と、インターンシップ授業などの実績を活かして、山形県全域に展開する学外研修科目の開発を行います。学外研修科目を受講した学生は、職場や社長のファンとなって入社し、あるいは自身が起業家となって地域の就職率向上に結びつくことが

期待できます。

対策２：課題解決科目の開発・整備

卒業生の多くが就職時に県外流出する二つ目の要因は、学生と地域社会のマッチングができていないことです。現在、人口減少の渦中にある地域では、若い人材の活躍を求めており、特に地方公共団体や企業、NPOなどが抱えている課題を、若者の立場だからこそ可能なやりかたで発見し解決することが期待されています。実際これまでに、県内の各大学が様々な地域課題解決を目的としたフィールドワーク授業を初年次の学生に向けに展開してきました。しかし専門課程に進んだ学生は地域活動の継続が困難になる。また、地域課題解決に熱心な学生の多くが県外出身者であり、卒業後も地域との関わりを続けることを念頭に、そのまま地域に定住する可能性は低いです。

そこで学生が主体となって、地域の大人だけでなく、小・中・高の児童・生徒に対しても、地域や大学の魅力を伝え、発信する課題解決科目を開発・整備します。課題解決科目を受講した学生は、地域を能動的に理解し、地域へ定住する意識が高まることが期待できます。課題解決科目に参加した児童・生徒、そして大人たちに、県内大学に対する興味を持たせ、県内大学進学率の向上を期待できます。

対策３：協働研究科目の開発・整備

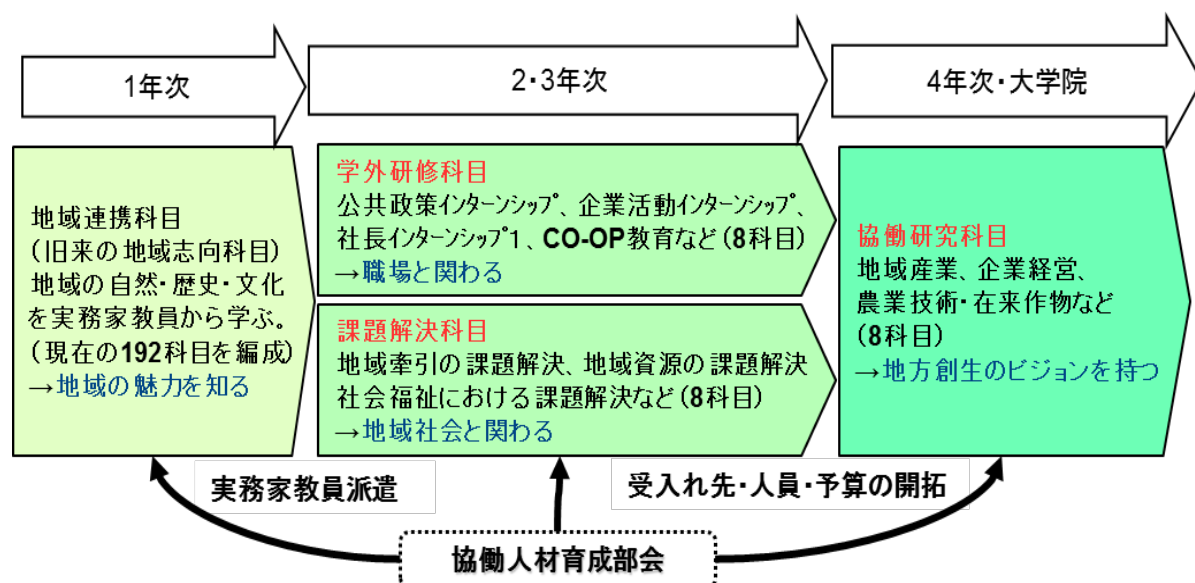
卒業生の多くが就職時に県外流出する三つ目の要因は、学生が地方創生のビジョンを抱くことができないことです。いま県内の各大学が、様々な産学官金連携をとおして新産業の創出を試みています。我が国全体の地方創生のためには、日本でも有数の人口減少地域である山形が、地方創生のモデルケースとなる必要があり、そのためには地方創生のビジョンを持った学生の活躍が必須です。だが、学生に新産業の担い手として必要な能力や心構えを身に付けさせる教育、あるいは様々な仕事や地域の現状を俯瞰したイノベーションを体験させる教育が、十分に整備されていません。地域の職場でも、有能な学生が活躍できる環境が整っていません。有能な学生は、より活躍の可能性が広がる東京圏あるいは海外へと転出してしまいます。

そこで、学生主体で地方創生事業を開拓していく協働研究科目を開発・整備します。学生は、最先端の地方創生事業に携わり、かつ、グローバル社会へ展開する仕事の現場を山形県内にて体験することで、地域牽引のリーダー、チェンジメーカーへ成長することが期待できます。また、国内・世界中から優秀な人材が集まる創造地域として山形を整備することは、移民の受け入れなど、グローバルな観点からの人口減少対策としても期待できます。

対策４：協働人材育成部会の運営

各コーディネーターが事業を推進していくために、それぞれの責任で随時に組織して開催する協議の場が協働人材育成部会です。ここには、教員・学生だけでなく、地方公共団体・企業・NPOなど、人口減少に関連した諸問題に関心を持ち、課題の解決に関わりたいと

望む人々が参加します。参加者を活用して、学外研修科目の受入れ先の開拓、課題解決科目の受入れ先の開拓、協働研究科目の受入れ先の開拓、及び事業全体の開拓を行います。協働人材育成部会の運営によって期待されるのは、人材育成だけではありません。多様な人々の交流で地方創生事業を開拓する場として、地域の人々が人材育成という目的で協働する地域活性化の場としても機能し、全県的に展開します。



事業目標

以上の取り組みを通して、卒業生の地元就職率の向上を目指します。平成28年度の山形大学卒業者のうち地元就職者数は249人、地元就職率は約26%です。5年間の間に、地元就職者数を約350人（100人増）、地元就職率を約35%（10%増）とします。

現在山形県全体として、地方創生に向けての大幅な雇用増を計画しています。そのためには若者の地元就職率の向上だけでなく、受け皿となる雇用の場を増やすため、産学官金連携による新産業の創出も計画しています。地元就職率の向上による人口減への歯止め、地元経済の活性化による企業成績の向上によって、税収・収益の増加を計画しており、そのことによって更なる雇用増を目指していきます。一連の事業によって、最終年度には、事業開始初年度と比較して、就職者増に対応する150人の雇用増を目指します。

・事業概要図

山形県の特徴

三世帯同居率・・・47都道府県中**1位** ⇒ 家族全員で働きやすい環境

社長輩出率・・・47都道府県中**2位** ⇒ 事業継続・起業がしやすい環境

しかし・・・

人口減少率・・・47都道府県中**ワースト5位**

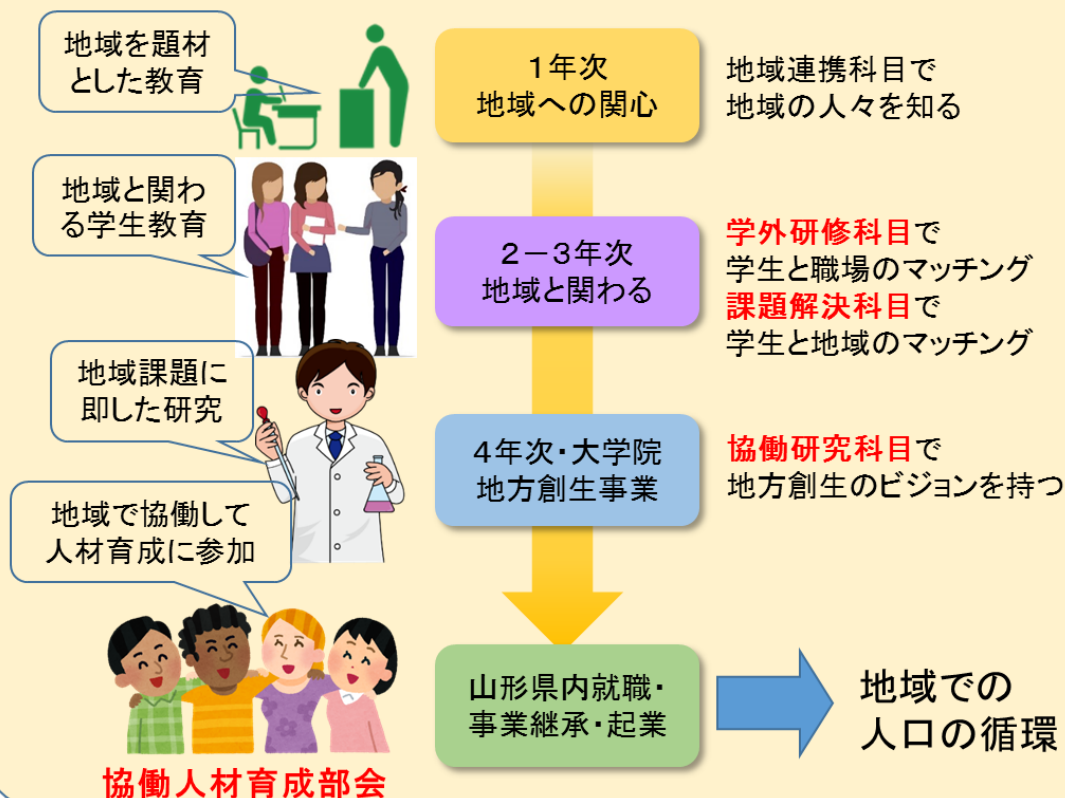
高齢化率・・・47都道府県中**ワースト5位**

背景にあるのは若年層の県外流出

若年層の県外流出の要因

- ① 学生時に職場とのマッチングができていない
- ② 学生時に地域社会とのマッチングができていない
- ③ 学生時に地方創生のビジョンを抱くことができない

そこで、**協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業**は、**コーディネーター**を活用して、・・・



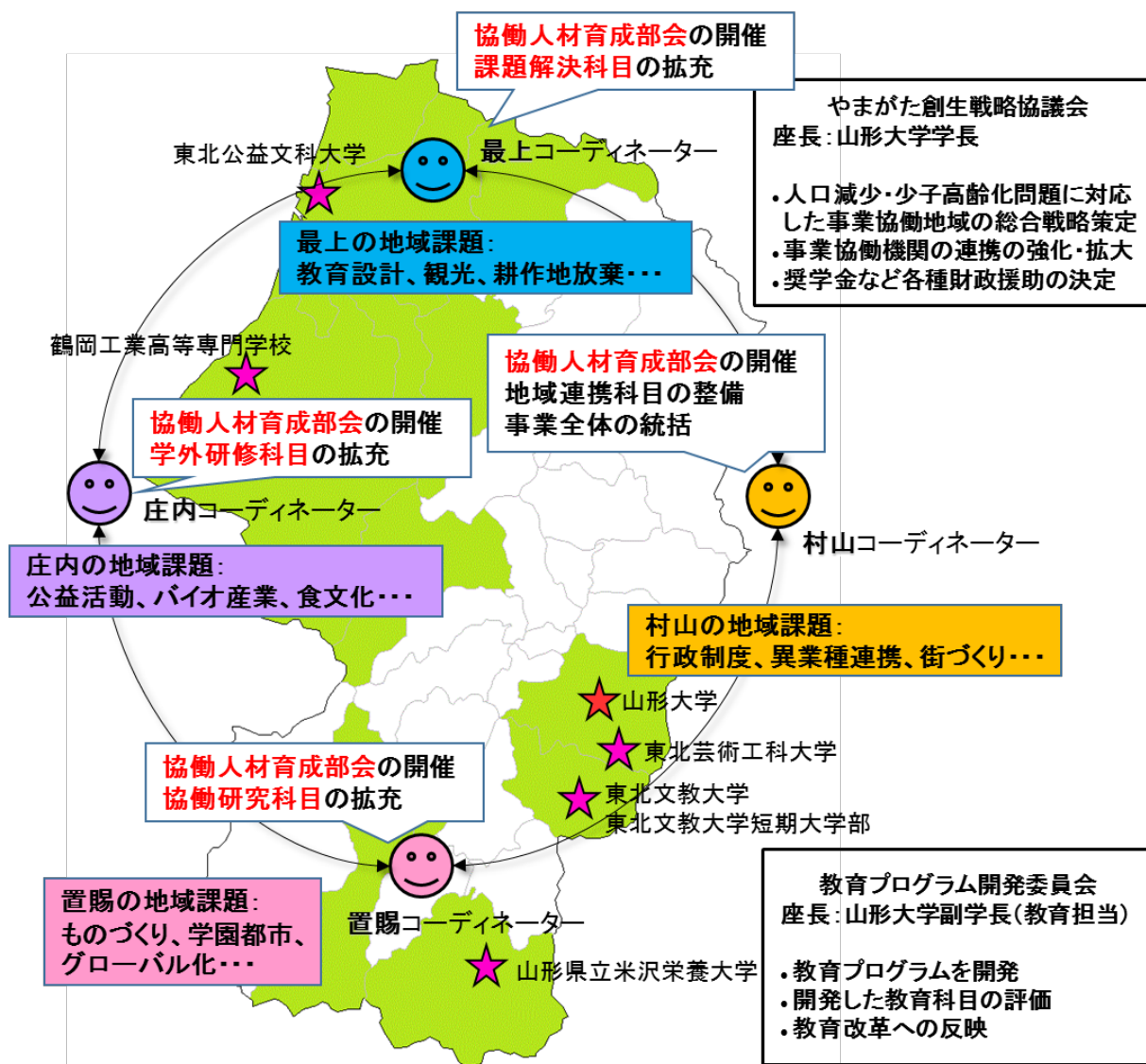
関連事業

- ・ 美しい山形を活用した「社会人力育成山形講座」の展開(H24～)
- ・ 東日本広域の大学間連携による教育の質保証・向上システムの構築(H24～)
- ・ フロンティア有機材料システム創成フレックス大学院(H24～)
- ・ 自立分散型(地域)社会システムを構築し、運営する人材の育成(H25～)
- ・ 地域力結集による人材育成と複合型課題の解決－庄内モデルの発信(H25～)(事業主体は東北公益医科大学)

・連携自治体

事業協働地域（自治体）

COC+事業では、既にCOC事業で連携している山形県と6市町村に加え、新たに7市町村（酒田市、長井市、西川町、飯豊町、三川町、庄内町、遊佐町）と連携して事業を進めています。



事業参加企業等として山形県商工会議所連合会、山形県商工会連合会、山形県工業会、山形県銀行協会、山形県信用金庫協会、一般社団法人山形県経営者協会、認定NPO法人山形創造NPO支援ネットワークと連携して事業を進めています。

COC+事業参加大学として6大学（山形県米沢栄養大学、鶴岡工業高等専門学校、東北公益文科大学、東北文教大学、東北文教大学短期大学部、東北芸術工科大学）と連携して事業を進めています。

4 COC⁺事業の取組と成果

4-1 教育プログラム開発委員会の開催

平成28年度全4回、事務局会議室・農学部・工学部・医学部でテレビ会議システムによる教育プログラム開発委員会を開催しました。

教育施策の実施に関わる統括教育ディレクター、コーディネーターが参加します。平成29年度に向け山形大学では全学的な教育ディレクターの編成等、学長のリーダーシップの下に柔軟な教育改革が可能となっており、開発した教育プログラムを全学的な教育改革へ柔軟に反映するとともに、参加大学へ波及していきます。地方創生は本学の基本方針であり、更に山形大学は山形県教育委員会と地域の抱える教育課題に適切に対応し、地域における教育の振興と発展に寄与することを目的に相互協力に関する協定書を締結しています。高大連携も踏まえた教育改革への下地はできています。



・教育プログラム開発委員会出席者名簿

	氏 名	所 属
委員長	安 田 弘 法	山形大学副学長（教育担当）
委 員	大 場 好 弘	〃 副学長（社会連携担当）
同	大和田 浩 子	山形県立米沢栄養大学健康栄養学部長
同	増 山 知 也	鶴岡工業高等専門学校 准教授
同	鎌 田 剛	東北公益文科大学庄内オフィス長
同	小 野 敦	〃 コーディネーター
同	皆 川 治	〃 特任講師
同	永 盛 善 博	東北文教大学・同短期大学部子ども学科 准教授
同	吉 田 朗	東北芸術工科大学 教務委員長
同	佐 藤 圭 次	山形県学事文書課 課長補佐
同	西 上 勝	山形大学統括教育ディレクター（人文学部）
同	小 川 雅 子	同 上 （地域教育文化学部）
同	大 西 彰 正	同 上 （理学部）
同	永 瀬 智	同 上 （医学部）
同	佐 藤 慎 哉	同 上 （医学部）
同	村 山 哲 也	同 上 （農学部）
同	千 代 勝 実	同 上 （基盤教育院）
同	佐 藤 和 志	山形大学COC推進室チーフ・コーディネーター
同	堀 内 史 朗	〃 コーディネーター
同	滝 澤 匡	山形大学教育・学生支援部 准教授

（敬称略）

4-2 協働人材育成部会の開催状況

事業協働機関・地域・企業との地域推進部会を次のとおり開催しました。

地域名	開催日	主な議題
村山地域	① 平成 28 年 5 月 18 日(水)	COC+事業の概要
	② 平成 28 年 9 月 25 日(日)	山形からLGBTを考えよう
	③ 平成 28 年 10 月 1 日(土)	高大連携事業 普通高校キャリア教育
	④ 平成 28 年 10 月 5 日(水)	「特許活用戦略」 商品プレゼンテーション大会
	⑤ 平成 28 年 10 月 15 日(土)	高大連携事業 普通高校キャリア教育
	⑥ 平成 28 年 10 月 20 日(木)	I C T 協働部会
	⑦ 平成 28 年 11 月 30 日(水)	異文化の世界へ飛び込もう ワークショップ
	⑧ 平成 28 年 12 月 7 日(水)	社会理解「キャリアデザイン」
	⑨ 平成 28 年 12 月 19 日(月)	「山寺」成果報告会
	⑩ 平成 29 年 1 月 7 日(土)	高大連携事業 交流会
	⑪ 平成 29 年 2 月 11 日(土)	平成 28 年度 COC/COC+シンポジウム



第4回協働人材育成部会の様子



高大連携キャリア教育の様子



ワークショップの様子



高大連携事業 交流会の様子

地域名	開催日	主な議題
庄内地域	① 平成28年 4月20日(水)	平成27年度後期インターンシップ報告会・協働人材育成部会
	② 平成28年 5月19日(木)	地域推進部会（鶴岡市）・協働人材育成部会合同開催
	③ 平成28年 5月25日(水)	平成27年度春季CO・OP教育 教育成果報告会
	④ 平成28年 8月29日(月)	農業の未来を作る後継者との意見交換会
	⑤ 平成28年 9月23日(金)	リーダーシップ入門2
	⑥ 平成28年 9月29日(木)	・鶴岡市上下水道部と山形大学農学部との共同研究開発紹介 下水処理水利用による飼料用米栽培に関する研究 ・地域再生制度 ・次世代施設園芸導入加速化支援事業
	⑦ 平成28年11月 3日(木)	新庄市企業紹介動画プロジェクト（COC+事業 協働人材育成部会）
	⑧ 平成28年12月 3日(土)	地域課題解決全国フォーラム
	⑨ 平成28年12月 7日(水)	平成28年度夏季CO・OP教育 成果報告会
	⑩ 平成29年 1月 6日(金)	企業紹介冊子制作プロジェクト
	⑪ 平成29年 1月 8日(日) ～平成29年 1月10日(火)	「山形の酒造りと文化-日本酒編」
	⑫ 平成29年 2月 5日(日)	庄内グリーンツーリズム推進協議会連携事業
	⑬ 平成29年 2月17日(金)	新庄市企業紹介動画プロジェクト2（COC+協働人材育成部会）
	⑭ 平成29年 2月22日(水)	新庄市企業紹介ビデオ制作事業
	⑮ 平成29年 3月16日(木)	平成28年度 地域・大学協働人材育成プログラム成果報告会



新庄市企業紹介動画プロジェクトの様子



庄内グリーンツーリズム事業の様子

地域名	開催日	主な議題
置賜地域	① 平成 28 年 7 月 14 日(木)	米沢市におけるインターンシップ事業の事例紹介
	② 平成 28 年 10 月 13 日(木)	地域推進部会（米沢市）・協働人材育成部会合同開催 ・雪に関する総合的研究について
	③ 平成 29 年 1 月 16 日(月)	米沢市雪対策総合計画について
	④ 平成 29 年 3 月 15 日(水)	木俣研究室「城戸メノウ乳鉢製作所研究発表会」



第 2 回協働人材育成部会の様子



米沢市雪対策総合計画の様子

○山形新聞（平成 29 年 2 月 21 日） 13 面

東北公益大「社長インターンシップ」 山形大農学部が初参加

“かばん持ち”して職業観

キャリア教育の一環として東北公益文科大学（酒田市）が2012年度から取り入れている「社長インターンシップ」に、山形大農学部（鶴岡市）が今回初めて加わった。学生が地元企業の社長の“かばん持ち”を体験しながら職業観を磨く。両大学の7人が2～3月に希望する企業や県内総合支庁で学ぶ。山形大農学部からは大学院生を含む2人が参加。このうち食料生命環境学科3年の吉村真理菜さん（22）は、鶴岡市玉田3丁目に拠点工場を構える業務用食品製造販売の丸善食品工業（本社・東京、竹本博則社長）を研修先に選び、20日に初めて訪問した。

「貴重な機会、いろいろ吸収」

施設見学の後、竹本社長は「『魅力ある味』『味力』を追求している。庄内地方で生まれる豚骨のほほえみを購入し、ラーメンのスープなどを生産している」と説明。鶴岡に工場を開設して35年が経過するだけに触れ「地域との信頼を大切にしてきたからこそ、ブランドが浸透してきたと感じると語り掛けた。吉村さんは「資料だけでは分からない熱意が伝わってきた。貴重な機会なので、いろいろなことを吸収したい」と話した。研修期間は28日までで、取引先の訪問や開発会議に参加する。社長インターンシップは、県内高等教育機関が参加する文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（CO-COI）」共通プログラムに採択され、山大が新たに加わった。

竹本博則社長（右）から仕事への思いなどを聞く山形大農学部3年の吉村真理菜さん（左）
鶴岡市・丸善食品工業鶴岡工場

4－3 シンポジウムの開催

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC／COC＋）シンポジウム「先輩から後輩へ～山形で働き、学び、地方創生～」を開催しました。

山形大学は2月11日（土）、山形大学小白川キャンパスを会場に「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」シンポジウムと「地（知）の拠点整備事業（COC）」シンポジウムを開催し、地方自治体や関係機関、企業、大学生、高校生など約100人が参加した。

本学は平成25年度から文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」を実施しており、平成27年度からは「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」にも採択された（31年度まで）。今回のシンポジウムは大学生・高校生に対して『山形で働くこと、山形で学ぶこと』についての講演や発表を通じ、『山形で働き、山形で生活する魅力』を再確認することを目的に開催した。

冒頭、小山清人学長が「本事業では自治体、教育機関、経済団体合わせて26機関が一体となって山形県の喫緊の課題である人口減少、特に若者の県外流出にどう対応していくか、これからの山形をよりよくするにはどうすれば良いか、皆さんも一緒に考えていただきたい」と挨拶があり、本COC＋事業コーディネーターの松田修教授が県内の人口減少事情や本事業の目指すもの等、事業趣旨について説明した。

「山形で働く」と題した基調講演では、公益財団法人東北活性化研究センター会長の海輪誠氏が「東北地方の衰退を防ぐ第一の課題はやはり人口減少だが、山形、東北の魅力について再認識し、人生の価値観について若い方や学生の親世代の意識改革を起こすことで、地元でこそ豊かな暮らしがあるのだと知ってもらうことが地元定着に繋がるだろう」と語られた。山形県工業会会長／株式会社タカハタ電子代表取締役の安房毅氏からは、タカハタ電子での実体験や山形での暮らしに関連して「良い人と出会うことでより良い人生になっていく。衣食住が高水準で整っている稀な地域である山形で、人との出会いを大切にし、新しいことに一歩踏み出す勇気を持ってチャレンジし、成長していったほしい」との学生への期待が話された。

引き続き、「山形で働く」をテーマとして山形大学OGの斉藤慈氏、富田彩友美氏から、山形に就職しようと思った理由、有意義な大学生活を送るためのアドバイス、就職活動に向けての過ごし方など、大学生・高校生に向けた実体験に基づく貴重な話をお聞きすることが出来た。

続いて「山形で学ぶ」と題して、本学学生2人と県内高校生5人による東根市の民家をリフォームしてゲストハウスとして活用しようとする取り組みについて発表が行われた。

その後、会場を「山形大学文化ホール」に移して学生の多様な地域活動についてポスター掲示が行われるとともに、参加者の交流会が行われ、シンポジウムは盛会のうちに終了した。



細谷知行県副知事の挨拶



山形大学松田修教授の挨拶



海輪誠東北活性化研究センター会長の挨拶



安房毅山形県工業会会長の基調講演



山形大学 OG 斉藤慈氏の講演



山形大学 OG 富田彩友美氏の講演



Agasuke House Project メンバーの発表

○山形新聞（平成29年2月12日） 26面

なぜ「山形で働く」のか
山形大シンポ 卒業生、思い語る



県内に就職した山形大の卒業生が、地元で働くことを選択した思いなどを語った

三山形市

県内に就職した山形大の卒業生が、地元で働くことを選択した思いなどを語った
＝山形市

製造に興味があつたことや、学生時代に山形を好きになつたことなどを就職理由に挙げて「やりたいこと」を自分に向いていることを実践するため、そのプロセスを具体的に考えた場合、山形で働くことが最善だと考えた」と強調した。

山形市出身の富田さんらは地元への愛着、親や地域の人々へ恩返ししたいとの思いに触れ、「地域密着を経営者とする会社に共感した。仕事以外の趣味や地域イベントに参加することで、仕事にも意欲的に取り組んでいる」と充実した日々を紹介した。

海輪誠北活性化・研究センター会長、安房毅典千歳会会長が基調講演。約1,000人が出席し、同大学の意欲や地方創生に取り組む重要性を確認した。

文部科学省の「地創」の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）に採択されている山形大のシンポジウム、先輩から後輩へ「山形を学び、働く、地方創生」が1日、山形市の同大小日キャンパスで開かれ、同大卒業生が山形で働くことを選択した思いな

どを語った。「山形で働く」をテーマに、山形航空宇宙総務部の斎藤謙二さん（24）や人文学部人間文化科卒、山形信用金庫総務部の富田彩友美さん（25）も同大会生時代を振り返りながら意見発表を行った。

山形市出身の斎藤さんは

先輩から後輩へ。

～山形で学び、働き、地方創生～



(作画：山形大学地域教育文化学部3年 永田あかり)

プログラム

会場：基盤教育2号館221教室

1. 主催者・来賓挨拶 【13:30-13:35】

小山清人（国立大学法人山形大学長）

吉村美栄子氏（山形県知事）

2. COC+ 事業の説明 【13:35-13:40】

松田修（山形大学教授）

3. 「山形と地方創生」 【13:40-14:20】

海輪誠氏（公益財団法人 東北活性化研究センター会長）

安房毅氏（山形県工業会会長 / 株式会社タカハタ電子代表取締役）

4. 「山形で働く」 【14:20-14:50】

斉藤慈氏（山形航空電子株式会社 / 山形大学 OG）

富田彩友美氏（山形信用金庫 / 山形大学 OG）

5. 「山形で学ぶ」 【14:50-15:05】

Agasuke House Project メンバー

＜会場移動→文化ホール＞

6. 交流会 【15:10-16:00】

発表者との交流 / ポスター発表 / アンケート記入

全プログラム終了後、情報交換会

会場：厚生会館 【16:15-17:30】

日時
平成29年2月11日（土）
13:30～16:00

場所
山形大学小白川キャンパス
基盤教育2号館221教室 / 文化ホール

お問い合わせ・お申し込み

山形大学COC・COC+推進室上山サテライト

電話：023-695-6261

FAX：023-695-6229

E-mail: cocsuishin@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

〒999-3101 山形県上山市金瓶湯尻19-5

山形大学総合研究所501

主催 / 国立大学法人山形大学

共催 / 公益財団法人 東北活性化研究センター・株式会社ナツクサ

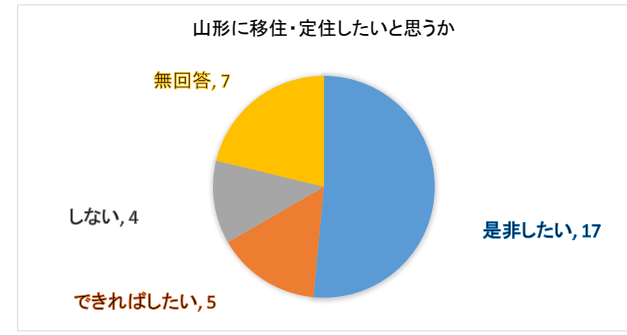
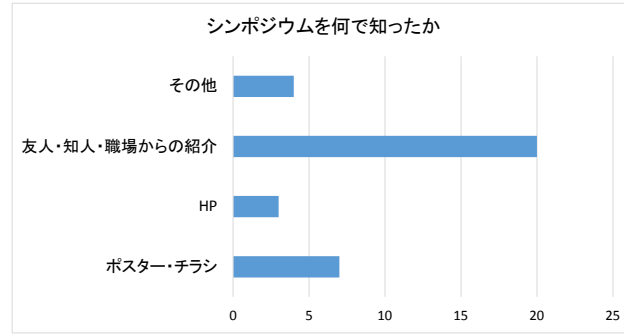
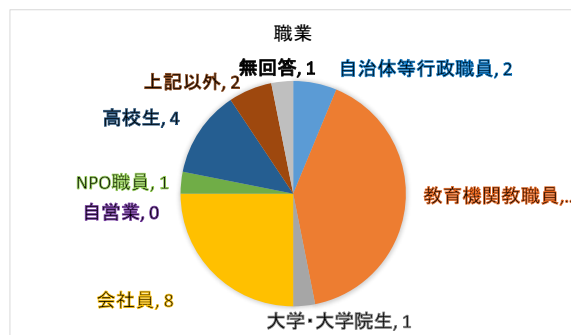
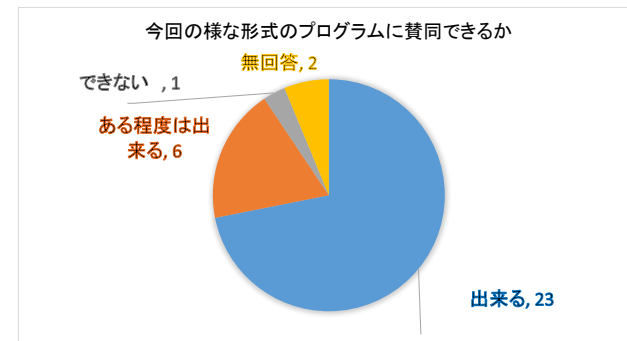
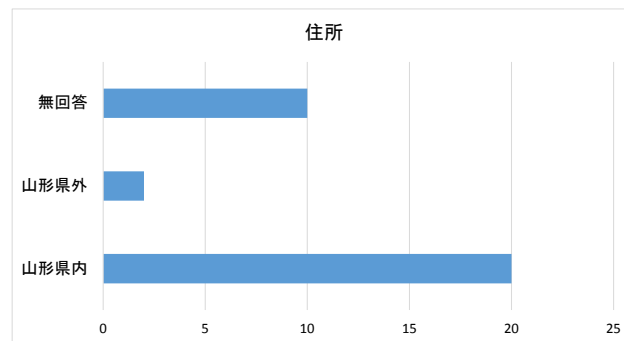
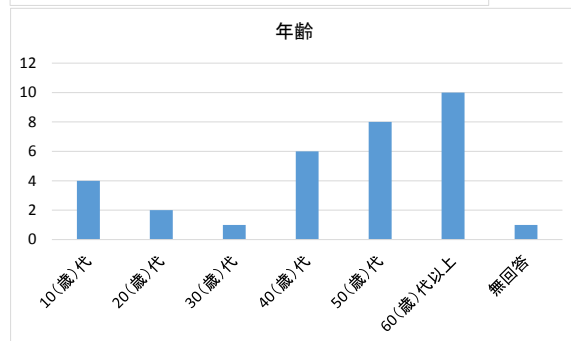
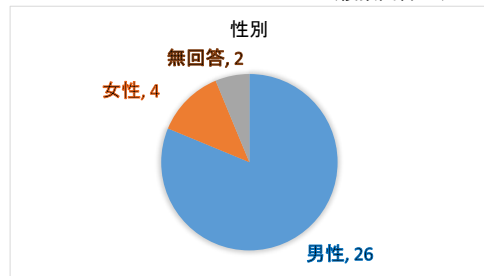
後援 / 山形県・山形県教育委員会・山形市・米沢市・鶴岡市・酒田市・上山市・長井市・西川町・真室川町・戸沢村・飯豊町・三川町・庄内町・遊佐町・山形県商工会議所連合会・山形県商工会連合会・山形県工業会・山形県銀行協会・山形県信用金庫協会・山形県経営者協会・山形創造NPO支援ネットワーク・山形県立米沢栄養大学・鶴岡工業高等専門学校・

東北公益文科大学・東北文教大学・東北文教大学短期大学部・東北芸術工科大学

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

性別	年齢	職業	住所	シンポジウムを何で知ったか	今回のシンポジウム形式に賛同できるか	定住したい							
男性	26	10(歳)代	4	自治体等行政職員	2	山形県内	20	ポスター・チラシ	7	出来る	23	是非したい	17
女性	4	20(歳)代	2	教育機関教職員	13	山形県外	2	HP	3	ある程度は出来る	6	できればしたい	5
無回答	2	30(歳)代	1	大学・大学院生	1	無回答	10	友人・知人・職場からの紹介	20	できない	1	しない	4
		40(歳)代	6	会社員	8			その他	4	無回答	2	無回答	7
		50(歳)代	8	自営業	0			(複数回答:4)					
		60(歳)代以上	10	NPO職員	1			無回答	2				
		無回答	1	高校生	4								
				上記以外	2								
				無回答	1								
				(複数回答:1)									



第5部 交流会



ポスター発表



ポスター発表



交流会の様子



交流会の様子



交流会の様子



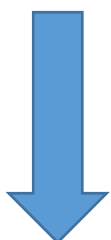
交流会の様子

フィールドプロジェクトA（まちづくりと社会参画）

プロジェクトのねらい

- ・ 実践的な経験を通した、子ども・保護者の支援の形、生活実態の理解
- ・ 社会人としての働き方や力量形成過程、施設環境等に関する考察
- ・ 実務的な資料作成、効果的なプレゼンテーションのあり方の会得

① オリエンテーション



子育て支援をめぐる現状
やまがた育児サークルランドの
活動紹介

② 子育てサポーター研修



やまがた育児サークルランド職員から
「子どもの発達」についての座学研修

③ 施設見学・実習・ボランティア



「子育てランドあ〜べ」と
山形市児童遊戯施設
「べにっこひろば」の見学
とそれぞれの施設における
実習とボランティア

④ ワークショップ（ワールドカフェ方式）（総括）



ワールドカフェ方式で
それぞれの施設の良い点・
改善点について意見交換

提言へ

受講者：児童教育コース 18 人 生活環境科学コース 6 人
連携先：特定非営利活動法人やまがた育児サークルランド

フィールドプロジェクトC - 科学体験教室 -

◆到達目標

- ・他者と共同し、自然科学系実験教室の企画・運営を通し、**地域貢献について多面的かつ的確に把握**できるようになる。
- ・実験教室での指導を通して、**講義や教育実習では得られない技能を獲得**できる。
- ・自然科学を専攻する学生にあっては、「**自然科学**」の知識を深める機会となり、自然科学を専攻しない学生・自然科学（理科）に対して不得意感を有する学生にあっては「**理科嫌い**」「**理科不得意**」から**脱出**できるチャンスとなる。

◆平成28年度の実施内容

日時	テーマ	学生数
5月7日	極低温の世界のふしぎ	14
5月21日	実験器具を使いこなそう	10
5月28日	光を分解しよう	13
6月11日	顕微鏡を使いこなせるようになろう	14
6月12日	色のかわる反応	6
6月25日	色のかわる反応	6
7月2日	顕微鏡をつくって観察してみよう	13
7月9日	きまりを使って楽しいものづくりをしよう	14
7月10日	科学実験コーナー	8
8月6日	化学実験	8
8月27日	化石を身近に感じよう	3
10月1日	化石採集に行こう	10
10月29日	とばして遊ぼう	16
10月29日	科学実験教室	2
11月5日	科学マジックグッズを作ろう	15
11月26日	音で遊ぼう	13
12月3日	化学マジックに挑戦しよう	17
12月17日	3D万華鏡をつくろう	8
1月21日	身近なもので電池を作ってみよう	18
1月28日	空気で遊ぼう	19
2月4日	静電気の不思議を体験しよう	11
2月25日	磁石で遊ぼう	

おもしろ実験教室	年8回	コース名	履修人数
サイエンスキッズ	年4回	児童教育コース	8
親子科学あそび教室	年4回	食環境デザインコース	7
山形県との連携	年3回	生活環境科学コース	9
その他	年3回	システム情報学コース	9

授業は、「講義」・「実習」・「報告」で構成

履修者は、

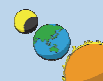


- 山形大学と山形市理科教育センター共催の「おもしろ実験教室」（年8回）
- 山形県産業科学館で開催される「ふしぎ体験教室」（年2回）
- 理科センター主催の「サイエンスキッズ」（年4回）
- 理科センター主催の「親子科学あそび教室」（年4回）
- 山形大学主催の「実験教室」

に参加し、**実験教室を企画・運営**する。

「おもしろ実験教室」は予備実験と本実験から成り、本実験教室への参加を基本として、上記の教室から**合計12回の参加を目標**とする。

本年度は、予備実験を含めて全30回の実験教室を実施した。



◆参加児童・生徒の感想

➢極低温の世界のふしぎ

- ・また来たい、よく分かった、少し大変だった、みんなと協力できた。
- ・やったことがない実験ができて良かった。
- ・もっと液体窒素のことを知りたい。
- ・予想と結果が異なっていて楽しかった。
- ・理科で遊べるなんて驚きだった。

➢光を分解しよう

- ・光が見えて楽しかった。
- ・自分で作ったものを使って楽しかった。
- ・カッター作業が楽しかった。
- ・先生(大学生)に教えてもらえて楽しかった。
- ・蛍光灯とLEDの違いが分かった。

➢化石採集に行こう

- ・大きい化石や小さい化石があることが分かった。
- ・レアの化石は採れなかったがマツモリホタテの化石が採れてとてもうれしかったです。



- ・化石採り初だけどすごく楽しかった。来年もできたらやりたい。
- ・今日、はじめて化石を採ってみた。先生達もやさしかったし、楽しく出来たから良かった。貝の化石しか採れなかったが、いろいろ種類があつてびっくりした。今日は良い経験をしたと思う。
- ・今度はまた別の場所で採集したいです。

➢科学マジックグッズを作ろう

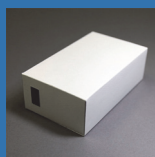
- ・振り子を揺らすのが難しかった。
- ・グッズをたくさん作れて楽しかった。
- ・色んなものを作りたい。
- ・班のみんなで協力できた。

➢化学マジックに挑戦しよう

- ・色んな液を入れて色々な色に変わって面白かった。
- ・ムラサキイモは色が変わることが分かった。
- ・色が変わるのはアルカリ性と酸性が関係していることが分かった。皆と仲良く安全に気を付けて協力して化学の面白さを感じることができて楽しかった



◆おもしろ実験教室の様子



◆成果

- ・コースの枠組みを超えて協働して実験教室を運営することができた。
- ・履修者の増加によって学生1名あたり2-3名の子どもの目を配ることができたため、学校では実施困難な実験や工作を行うことができた。
- ・実験教室参加者にはリピーターが見られるなど、地域教育の支援を目的の一つに掲げる本プロジェクトの役割を果たした。
- ・講義では習得できない実践的な教材開発法や実験技術を体験できた。

2016フィールドプロジェクトE（地域の自然・景観）

【事業の目的】 山形の自然、景観（文化、歴史等）について、フィールドワークを通して学習し、アルカディア街道IB倶楽部と協働でおこなう事業に、学生が自立的に参加し、成果報告する。試行錯誤しながら行事の準備していく体験と、IB倶楽部や参加者との交流を通じて、地域と連携した活動の計画・運営する力を養う。また地域についての事前の学習やフィールドワークが重要であることを学ぶ。

【履修学生】 児童教育コース5名、異文化交流コース4名、生活環境科学コース2名、システム情報学コース1名

【事業の概要】 IBクラブと連携して、6月12日（日）日光研修会（協働）、9月25日（日）“明治の山形と文化を巡る～イザベラ・バードの足跡を辿って～”（共催）の企画・立案・準備・実施・まとめの他、5～7月に毎週日本奥地紀行の学習会を行った。そのフィールドワークとして“日光研修会”（6月11日），“上山市～川西町”の街道見学を行った。
 実際の実施日程は以下の通り。

4月12日（火） オリエンテーション。
 5月11,18日, 6月1,8,15,22,29日（水） 学生と教員で「日本奥地紀行」の輪読会。
 5月25日（水） 渋谷光夫先生の講義
 6月12日（日） IB倶楽部主催（協働：フィールドプロジェクトE）の“イザベラ・バードの日本奥地紀行～日光研修会～”（学生10人、教員2人参加）
 7月6,13,20,27日（水） 学生と教員で「日本奥地紀行」の輪読会および行事の準備・打ち合わせ。
 9月20日（火） 留学生オリエンテーションでの行事勧誘、行事の準備。
 9月23日（金） 渋谷先生の畑で里芋掘り、その後行事の準備。
 9月24日（土） 行事の準備
 9月25日（日） 明治の山形と文化を巡る～イザベラ・バードの足跡を辿って～ 開催（参加者総数 市民3人、留学生31人、学生・教員14人、IB倶楽部6人、その他2人）
 12月7日（水） 行事の反省会。アンケートまとめ。
 12月26日（月） 川西町～上山市フィールドワーク（学生9人、教員2人）



6月12日（日） 日光研修会（金谷ホテル歴史館前）



9月20～24日行事の準備（里芋掘り、準備会議）



9月25日交流会の集合写真
 （“つや姫おにぎり作り”のお米は山形つや姫ブランド化推進本部からいただきました）



9月25日（日）行事 街歩き（旧済生館，東大手門，湯殿山神社）



9月25日（日）行事 交流会（東部公民館）芋煮，つや姫でおにぎり作り



12月26日（月）川西町～上山市フィールドワーク

フィールドプロジェクト F : 「Food & Art」 成果報告

＜指導教員＞小酒井貴晴准教授(食環境デザインコース)、小林俊介教授(造形芸術コース)

＜受講者＞ 食環境：伊藤菜穂、菅原萌子、滝澤佳歩、中村悠、野田知見、廣野知佳、本間直美、皆川結、吉川瑛里
造形芸術：青山星菜、○泉千晶、白林彩音、高野琴絵、夢田優月乃、○中内帆乃香、三浦真穂、米倉愛

目的 山形大学の知と行動力で、西川町の良さを引き出し、西川町を盛り上げる。
その経験を通じて、社会に生きる意義と自己実現の術を学ぶ。

活動 4、5月に全員で西川町（現場）へ訪問して、西川町の現状を理解に努めた。
その上で、3チームに分かれ、11月まで何度も現地視察と試作品作成を繰り返した。

広報

チーム目的

メニュー開発チーム、空間デザインチームの活動内容を外部へ発信するとともに、西川町の良さを多くの人に知ってもらう。

活動内容

【学生名刺の作成】
・food&artのロゴと、それを用いて名刺を作った。



【フェイスブックの更新】
・プロジェクトの進捗状況と西川町のいいところの情報を発信した。



【ポスター作成】
・「西川町をもっと好きになる会」のイベントのポスター、チラシを作成した。



【ミニパンフレットの作成】
・そば粉とガレットについて知ってもらうため、ポップアップを作成して「西川町をもっと好きになる会」で配布した。



食空間デザイン

チーム目的

学生の知識や技術を盛り込んだ西川町の伝統工芸品に触れ、良さを知ってもらい、伝統工芸品を広める。

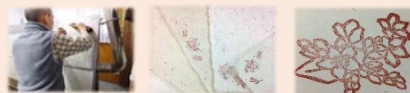


作品

【 瑠璃 箸置き 】
・伝承館にてストラップ作りを体験した。
・透明のエポキシ樹脂中に小さな瑠璃を入れた。
・月山の形をイメージした。



【 月山和紙① ランチョンマット 】
・和紙を水で切り、素材を活用した。
・西川町をイメージとしたデザインの消しゴムハンコで模様をつけた。



【 月山和紙② ぼんぼり 】
・伝承館にてぼんぼり作りを体験した。



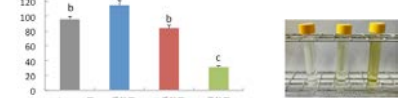
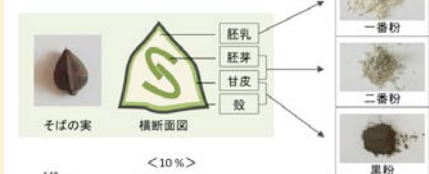
メニュー開発

チーム目的

西川町らしい食材と機能性を意識した名物メニューの開発

活動内容

そば・黒粉のメイラード反応抑制効果



黒粉にはアンチエイジング効果が期待できる

【西川ガレットの提案】
既成のそば麺ではなく、フランス田舎料理をイメージするガレットを作成する



・そば粉(黒粉)の配合割合の検討
黒粉ポリフェノールの苦み対応
・生地合う具材の検討



11月；現地成果発表会「西川町をもっと好きになる会」

2016年11月23日 プロジェクトの成果発表会として、『西川町をもっと好きになる会』と題したイベントを西川町の「月山湖 水の文化館」にて開催。

『そば粉西川ガレットの販売・提供』 そば粉を使ったガレットの販売。メニューはガレットの具や添え物によって4種類を提供。特製ブレンドそば粉は、玉谷製麺との共同企画として実現。

『月山和紙やメノウを用いたデザイン作品の展示』 西川町の「月山和紙」と「メノウ」を使用したオリジナルの雑貨の展示。月山和紙のぼんぼりやランチョンマット、メノウの箸置きなど。志津温泉の旅館から、「すぐにでも実用化して、宿泊者へ提供したい」との商談相談も。

『悪七さんのお話会』 月山ダムの建設にあたってダム底に沈んだ集落に住んでいた、悪七四郎氏をお迎えした。当時の生活や西川町の歴史などについてお話や詩歌を聞かせていただいた。

『一般町民を前にしたプレゼンテーション』 メニュー開発チーム、食空間デザインチーム、広報チームの3つのチームごとに、本プロジェクトの経過を含めた成果報告をプレゼンテーション発表。



フィールドプロジェクト G (国際理解)

メンバー：小林眞子(異文化) 井村凌聖(異文化) 阿部亜紗子(児教) 石川培(児教) 尾形瑞紀(児教) 加賀竜也(児教) 嶋倉浩晃(児教) 鈴木千晴(児教) 須藤安未日(児教) 須藤早紀(児教) 半澤龍(児教) 藤谷優紀(児教) 児玉里緒(児教)

(1)活動内容について

本プロジェクトでは小規模の学校(蔵王第三小学校)と大規模の学校(南沼原小学校)で学校の実態に合わせて学生が自ら外国語活動の授業を立案・実践し、異文化理解の面で地域貢献を行った。

(2)蔵王第三小学校

普段の外国語活動の様子

- ・たった3人(複式)での授業...
- ・ALT とほぼマンツーマンだから聞く耳ができています

実践

- ・ペアやグループでの活動を取り入れた。
- ・クリスマスコスチュームやBGMで特別な雰囲気作り。

(3)南沼原小学校

普段の外国語活動の様子

- ・30人の児童と担任が1人
- ・英語が少ないなあ...

実践

- ・クラスルームイングリッシュを効果的に使用。
- ・ゲーム性を高めて、グループで協力しながら英語を使う活動を取り入れた。



【蔵王第三小学校での授業風景】



【南沼原小学校での授業風景】

(4)本プロジェクトを通して

- ・実践を通して多くのことを学んだ。その中でも、「小学校の規模、児童の実態に応じて、活動内容・活動に参加する学生の数・教材を変えながら授業を行わなければならない」ということが一番の学びである。
- ・同じ教材でも、少人数学級・30人超の学級、教師が変わるだけで、たくさんの使い方を見つけることができた。
- ・学生が教材を自分たちの手で作って準備したことで、児童の反応は非常に良かったと思う。
- ・次回の学習指導要領改訂から、外国語活動は5・6年生では教科化、3・4年生でも必修化になる。小学校教員免許取得には、外国語活動が必修ではないので、ぜひこのフィールドプロジェクトGに参加してほしい。

【使用した教材】



フィールドプロジェクトH＜地域音楽文化交流＞

代表者 佐川馨先生

1. 連携先

- ①山形市立第五小学校
- ②山形大学小白川キャンパス保育所のびのび
- ③山形大学附属幼稚園
- ④東原幼稚園

2. 参加者

音楽芸術コース：21名
児童教育コース：10名



3. 事業の目的

「フィールドプロジェクトH＜地域音楽文化交流＞」のテーマは2つ、到達目標は5つある。

＜テーマ＞

- 地域の子どもや住民とふれあいながら、音楽文化交流を活発にするための基礎的知見を身につける。
- 学内で学んだ理論的学習と、技術的学習によって得られた学修成果を総合し、それらを活用した総合的な実践力を身につける。

＜到達目標＞

- ① 地域及び各学校の音楽教育の実状や特色を踏まえた鑑賞プログラムやワークショップを企画できる。
- ② 上記1の実施に伴い、計画的な協議を重ね、効率よく準備できる。
- ③ 上記1の実施に伴い、演奏内容の理解を深め、音楽活動の喜びを味わわせるための解説資料の作成や進行の工夫ができる。
- ④ 上記1の実施に伴い、関係機関との折衝、文書作りなどの事務作業及び連絡調整を円滑に進めることができる。
- ⑤ 実践内容の省察を通して自己の課題を確認し、問題解決のための具体的な方策を述べることができる。

Let's ダンス♪



4. 事業の概要

事業は二つのミニプロジェクトで構成されている。ミニプロジェクトⅠは、山形市立第五小学校、附属幼稚園、山形大学保育所のびのび、東原幼稚園と連携した「ピクニックコンサート」である。ミニプロジェクトⅡは、市民向けの音楽鑑賞教室「キャンパスコンサート」の企画実施である。これらの実施にあたっては、下記の組織及

び進め方で取り組んだ。

5. 実施の流れ

- ① 関係機関との打ち合わせ
- ② 実施日を決定し、責任者（佐川先生）に報告する。
- ③ 参加メンバーを決定し、楽譜を準備する。
- ④ プログラム決定後、役割分担をして当日のスケジュールを決める。
- ⑤ 当日、役割ごとに仕事を行う。

6. 各事業の実施記録

(1) ミニプロジェクトⅠ：ピクニックコンサート

- 第1回：H28.10.11（火）山形市立第五小学校3、4年生
第2回：H28.10.21（金）東原幼稚園
第3回：H28.10.27（木）山形市立第五小学校1、2年生
第4回：H28.11.8（火）山形大学保育所のびのび
第5回：H28.11.18（金）山形市立第五小学校5、6年生
第6回：H28.12.16（金）山形大学附属幼稚園



(2) ミニプロジェクトⅡ：キャンパスコンサート

- 第1回：H28.10.8（土）山形が生んだ音、音楽—紺野陽吉の音楽—
第2回：H28.11.19（土）オペラで楽しむ日本の民話—林光作曲《あまんじゃく
とうりこひめ》—
第3回：H28.12.10（土）2台ピアノの饗宴—6人で奏でる名曲の調べ—



7. 実施成果（参加学生のリフレクションシートから）

- ・普段の勉強を生かして地域の人たちと楽しむことができた実感した。
- ・子どもたちと関わり学んだことをこれからの学習に生かしたい。
- ・専門分野を生かし、子どもたちに喜んでもらえるような工夫をみんなで考えることができた。
- ・音楽の楽しさを伝えることができた。
- ・何度も話し合い、問題をグループで解決することができた。この体験は貴重であった。
- ・大きな充実感と達成感があった。
- ・普段関わらないコースの人と考えを共有できたことでより工夫を加えられた。
- ・事前準備が大変だった。
- ・仲間と協力しながら、互いに助け合いながらできた。

8. 今年度の総括と今後の課題

ピクニックコンサートのプログラム内容が格段の進歩を見せた。その大きな要因は、音楽芸術コースと児童教育コースの学生の交流にある。それぞれのコースで身に付けた能力をぶつけ合うことは互いにより刺激になったことだろう。また、お互いの得意分野を生かしながら生み出した企画内容は、学び合いながら協力して進めることの大切さを実感させたことだろう。しかし一方で、複数のコースで取り組むことによって打ち合わせ時間の確保が大きな課題となった。この点をどうするかを検討していきたい。



体験したことのない
楽器を体験したよ♪
みんなでお弁当、
美味しいな～♪

STOP!! 人口流出

～地元へ帰ろう～

～現状・目的～

現在地方都市における人口流出が社会問題として指摘されており、将来的には「地方消滅」という事態にもなりかねないと警鐘が鳴らされている。とりわけ若者の流出が顕著であり、山形県においても平成25年時点で20代の転出超過が3855人であり、県全体の転出超過の約9割を占めている（「人材の県内定着・県内回帰推進チーム」中間報告より）
本プロジェクトでは、進学・就職に伴い若者の進路決定と地域移動に注目した。そして、聞き取り調査を通して、どのような地域移動が要因に規定されているのかを検討したうえで、具体的な方策の提案を試みる

～事業の概要～

① 先行研究の整理（5～7月）

地方の若者の地域移動についての研究動向を把握のため、以下の2冊の研究所の講義

・吉川徹,2001,『学歴社会のローカル・トラップ』世界思想社

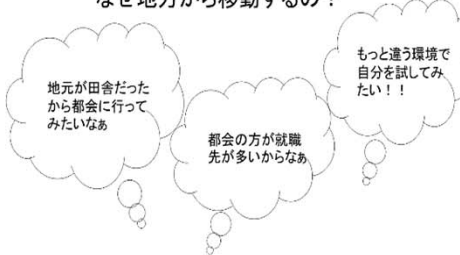
・石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子,2012,『「東京」に出る若者たち—仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房

→若者は自由に進路を選択しているようでありながらも、その移動パターンは社会構造に規定されている社会構造的な要因を考慮しながら若者の実際の進路選択時の地域移動を調査することで、具体的な問題点を析出することができる。と考える。

なぜ地元に残ったの？



なぜ地方から移動するの？



<質問項目>

基本的な属性
性別、年齢、学歴、職業、出身地、居住地等

進学時の進路選択

進学の有無、本人の希望、学力、家庭の経済状況、周囲の進学パターン、友人の影響、当時の満足度等

就職時の進路選択

就職先、本人の希望とその理由、就職市場の状況、就職活動の進め方、友人の影響、当時の満足度等



or

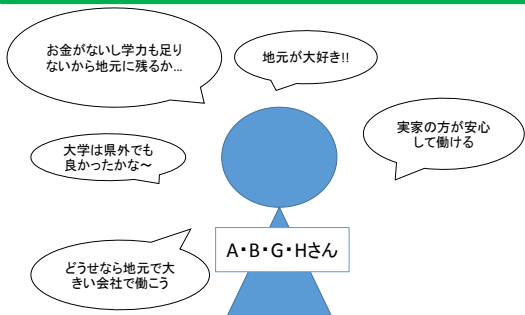


・対象者を20代とし、地域移動経験者と非経験者のそれぞれに聞き取り調査を行った。〈対象者34名〉

表1 地域移動のパターンと調査対象者数

	地元就職	県内就職	県外就職
地元進学	A	B	C
地元以外進学	D	E	F
非進学(高卒等)	G	H	I

インタビュー結果



人口流出を防ぐためには？

- ① 雇用を増やす
- ② 街コンの促進

① 雇用を増やす

説明: 地元愛は持っているけど都会の方が就職先が充実している

→雇用数を増やせば帰ってくるのでは？
例: 採用枠の中に「Uターン枠」を設ける

② 街コンの促進

説明: 恋人や恋人の実家の影響も少なからずあるように感じた

→街コンを行えば地元に残りそのまま住む人も増えるのでは？

フィールドプロジェクトJ 地域貢献

目 的

西川町で行われる草鞋祭りを通して地域住民と交流を図りながら、西川の現状課題を把握し改善案を考え、地域活性化に貢献する。大草鞋奉納祭りに参加することで祭りの楽しさを感じ、草鞋祭りを継続・発展させるためのアイディアを提案する。

☆大草鞋奉納祭りとは？

1611年、街道の治安を守るために生まれた志津（現西川）の生誕400年のお祭りとして2011年にできた祭り。米の収穫で得られる藁を打ち大草鞋をつくり、神輿として担いで志津を練り歩き、湯殿山神社本宮に奉納することが目的。湯殿山開山に合わせ、その前日の5月31日に行われる。

現 状

西川は文化で復興を試みようとして、春は大草鞋祭り、夏はたけのこ祭り、秋は護摩祈禱、冬は雪旅籠の灯りといった四季祭りをを行っている。しかし今回私たちが参加した草鞋祭りはまだできたばかりの祭りであるため、地域住民もどのように地域復興に繋がたらよいのか悩んでいる。また、人手不足や若者が少ないため活気のある町おこしが困難である。

実 施 内 容

まず、2回にわたり講演会を行った。その後合計4日間西川町を訪問し、祭りの準備を行った（藁打ち、草鞋づくり）。そして、祭り前日から現地で練習や説明を受け、当日を迎えた。また、後日数回に分けて成果や反省点など話し合う機会を設けた。

☆講演会

地域住民から西川の歴史・現状を聞き、今後の活動の説明を受けた。



図1 講演会の様子

☆藁打ち

藁打ちと二つの藁をひもで結ぶ作業を行った。

力仕事



図2 藁打ちの様子

学生の出番

☆草鞋づくり

藁の編み込みと草鞋の緒をつくり、大草鞋をつくった。



図3 草鞋づくりの様子

☆草鞋祭り

祭り前日に白装束の着用や神輿担ぎの練習と、祭りの最終ミーティングを行った。当日は大草鞋神輿を担いで志津の町を練り歩き、湯殿山神社に奉納した。



図4 草鞋祭りの様子

成 果

学生

- ・ 普段は体験できない貴重な体験ができた。
- ・ 地域の現状や課題を理解することができた。
- ・ 仲間と1つの事を成し遂げる達成感を味わえた。
- ・ 地域住民が喜んでくれて満足感を得た。

地域

- ・ 新聞に取り上げられたことで、町の宣伝になった。
- ・ 大学（学生）との関係が深まった。

問 題 点

- ・ 本来の目的である「山形大学と西川町の連携による町おこし」を達成したとは言えない結果となった。
- ・ 地域内でとどめるのか、外部の人も巻き込むのか、祭りの対象が明確でない。
- ・ 祭りとしてはインパクトが不十分。
- ・ 地域の人との交流が少なく、学生だけで行っているような印象を受けた。
- ・ 地域活性化と謳う割には、住民の参加が少ない。
- ・ 草鞋祭りなのに、担いでいる人は靴を履いているというのは中途半端な印象。
- ・ 開催日時が平日の昼間であったため、参加者が限定され、祭りが拡大されない。
- ・ 草鞋を担いでいない人は、ダラダラと歩いているだけだった。
- ・ メディアやインターネット、SNSを通しての宣伝が足りない。

解 決 策

- ・ 掛け声や唄、囃子などの音で祭りに活気づけるべき。
- ・ 交流の場を設けることで、地域住民と学生との団結力が深まり、よりよいプロジェクトとなる。
- ・ 西川町の小中学生も参加させるべき。
- ・ 全員が草鞋をしっかりと履いて行う。
- ・ 神事として規定された日程で実施してもいいが、それに付随するイベントとして、土日を利用して活動するべき。
- ・ 役割分担をしてまとまりを出した方がよい。
- ・ 祭りの広告・ポスター作成。
- ・ 大学生にSNSでの拡散を依頼する。

具体的な提案

- ・ 草鞋飛ばし大会
→ 一足に履いた草鞋を飛ばして距離を競う。
神事とは別に人の集まる土日に開催。
様々な部門を設け、老若男女が楽しめるようにする。
- ・ 草鞋音頭の製作
→ 山形大学の音楽科に依頼。
大学と地域の結びつきの象徴。
- ・ 草鞋祭りのポスター作成
→ 山形大学の造形芸術コースに依頼。
大学と地域の結びつきの強化。



【体力測定】

- ・測定補助
- ・指導
- ・実演

(握力、立ち幅跳び、上体起こし
ハンドボール投げ、長座体前屈、
反復横跳び etc)



フィールドプロジェクトK

《幼少年期の運動とスポーツ指導》

1

①中学校 体力測定:補助

小学校 体力測定:補助

②教員免許状更新講習:補助

③幼児:ダンス指導

2

【ダンス指導】

- ・指導

- ①ウォームアップ
- ②ダンス

【教員免許更新講習】

- ・実演[ダンス]
- ・「授業の導入・準備運動の工夫」
→教材としてのリズムダンス



山形大学基礎教育科目 「最上川から山形を学ぶ」

人文学部 下平裕之



3日目

- 8時30分 山形大学小白川キャンパス出発
- 大石田町（特殊堤防、乗船寺）
- 舟形町（活断層）
- 戸沢村（地滑り資料館、さみだれ大堰）
- 酒田市（城輪遺跡）
- ・宿泊：鶴岡市内

Ⅱ-1

最上川を見る基本的視点：
地域資源の分類

- ・文化的景観とは、風土に根ざして営まれてきた人々の生活や生業の在り方を表す景観のこと
- ・左沢の町場景観は、最上川河畔における政治都市と河岸集落という複合的な都市機能を示しつつ、中世から現代にかけての各時代の都市構造が重層した文化的景観である。

Ⅱ-3

歴史的資源の活用を学ぶ：
長井市中心市街地におけるフットパス



- ・風土的資源
 - ・峡谷部であるか、平地であるか
- ・歴史的資源
 - ・城下町（政治都市）であるか、商業都市であるか
- ・人の営みの資源
 - ・町割り、建物の配置、取り扱われた商品の違い等

テーマとねらい

- ・「最上川の自然と文化」を自分の目で確かめ学ぶ
- ・最上川は、源流から河口まで229kmに及ぶ日本有数の河川です。山形県の大部分が最上川の流域に含まれ、最上川と私たちの生活は深いかかわりを持っています。最上川を通じて山形の自然と文化の独自性と多様性を学びます

1日目

- 8時00分山形大学小白川キャンパス出発
- 米沢市（草木塔、直江石堤等）
- 長井市（商家群）
- 白鷹町（舟道開削跡）
- 大江町（舟運遺構等）
- 17時30分山形大学小白川キャンパス着

4日目

- 9時 宿泊先出発
- 庄内町（最上川氾濫原）
- 鶴岡市（羽黒山）
- 酒田市（市立資料館、山居倉庫、日和山）
- 17時30分山形大学小白川キャンパス着

地域資源の分類

1. 風土的資源（気象、自然など）
2. 歴史的資源（遺産、事件、物語、記憶など）
3. 人の営みの資源（物、仕事、生活、仕組み、イベントなど）
- ・「まちづくり」→風土と歴史がベースとなり、その中に価値を発見し、それに人の営みを加えて、いっそう価値あるものにするという行為



フットパスとは？

- ・イギリスを発祥とする、森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと（Foot）ができる小径（こみち）（Path）のこと
- ・長井市のフットパスの特徴→最上川の流れそのものや、舟運によって形成された町並みをコースに組み込んでいること

Ⅲ この授業から導き出される視点

- ・まちづくりによる活性化・・・そこに存在する資源がどのように活用されているか、またどのような成果を生み出しているか、という2つの側面から考える

左沢：中世から現代にかけての各時代の都市構造の重層性を利用し、文化的景観を前面に押し出したまちづくり
長井：舟運の歴史（フットパス）と、現代の観光・商業施設（あやめ公園、タスバークホテル、道の駅等）を組み合わせた、観光まちづくり

目標と授業計画

- ・最上川の自然と文化を自分の目で確かめることにより、河川と人間との相互関係についての理解を深め、自然と人間との共生のあり様を学びます。
- ・山形を発着点とした巡検を計4回行い、最上川の上流から下流までの様々な自然・文化遺産を自分の目で確かめます。

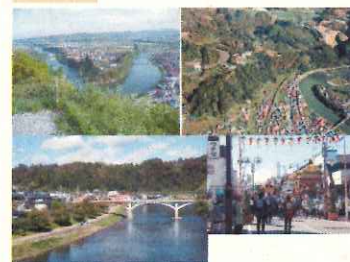
2日目

- 9時00分山形大学小白川キャンパス出発
- 天童市（寺澤沼旧河道）
- 東根市（小見川湧水）
- 河北町（紅花資料館）
- 村山市（大久保遊水池、最上川三難所）
- 17時山形大学小白川キャンパス着

Ⅱ 学生は何を学ぶか

Ⅱ-2

景観資源の活用を学ぶ：
大江町左沢の重要文化的景観



地域資源の活用とまちづくり

- ・それぞれのまちや地域の個性は、それらが保有する地域資源の形態や水準の違いによって特徴づけられる
- ・例：左沢と長井
- ・どちらも最上川舟運により繁栄した街であることは共通しているが、なぜ違いがあるのか？
- ・先にみた「地域資源の分類」を適用してみると・・・

- ・最上川流域の地域資源は、文化的景観という考えを軸に見ていくと、その特徴や重要性を理解しやすくなる
- ・自然・景観・歴史はそれ自体価値あるものであるが、現代的価値を加えて活用する方法もありうる
- ・例：歴史的建造物をカフェや店舗とする
- ・最上川流域の多様な地域資源を、「それをどうまちづくり・地域づくりに活用するか」という観点で見ると面白いかもかもしれません

PBL型の現地学習による学生の地域連携活動 ～山形県尾花沢市及び大石田町～

山形大学文学部

3年生

杉浦和貴子、青木瑞美、佐藤夏鈴、原田ひかり、吉松里紗

2年生

市川広樹、太田奈津子、岸佳乃、西條絵里奈、齋藤素海、佐々木優、佐藤葉々美、柴田耕大、進井将人、菅原さやか、菅原柚希、出川鈴穂、芳賀秀起、早坂光汰、渡邊唯、及川隼平

研究生 張紅

(指導教員 山田浩久)



尾花沢市・大石田町の地図

現地学習(尾花沢市・大石田町)

平成27年度秋学期「地誌学」

受講生2名

現地学習のテーマ: 国道347号線の通年通行計画

→地域の尾花沢市、大石田町にみる課題を考える

訪問地: 尾花沢市、大石田町、尾花沢市内の温泉(尾花沢温泉、尾花沢の温泉、尾花沢のそば、

インバウンド観光、尾花沢市及びその周辺の観光、尾花沢の産業、尾花沢の行政と計画



現地学習

- 2016年 7月23日(土) 他講義フィールドワーク
- 2016年 10月24日(月) ゼミ学生有志による視察
- 2016年 12月17日(土) 地誌学現地学習



成果物

歴史レポート

銀山温泉①

進井将人

芳賀秀起

及川隼平

尾花沢の歴史

市川広樹

齋藤素海

早坂光汰



成果物

ポスター

尾花沢市及びその周辺の景

杉浦和貴子、岸佳乃、張紅



成果物

パンフレット

尾花沢市内の温泉(銀山温泉以外)

青木瑞美、原田ひかり

尾花沢のそば

西條絵里奈、佐藤葉々美、柴田耕大



成果物

地元校正向け

尾花沢市ガイドブック

尾花沢の産業

太田奈津子、菅原さやか

尾花沢の行政と計画

菅原柚希、渡邊唯



成果物

広域観光プラン

銀山温泉のPR動画

インバウンド観光

佐々木優、出川鈴穂

銀山温泉②

佐藤夏鈴、吉松里紗



- 銀山温泉や尾花沢市内だけでの観光計画ではなく、県内や隣県などの幅広い観光資源を活用して、観光客が滞在・周遊できるようにするプランを提案する。
- 外国人観光客に東北の魅力を伝え、東北地方の観光事業の活性化につなげる。
- ツアーテーマ: 日本の歴史を巡る旅仙台空港を発着点として東北の各所を巡り日本の歴史を体感する。

観光プラン概要



<1日目> 仙台東港着 角館観光 上山で果樹狩り
↓ 岩手県平泉 大曲で酒造 仙台でお買い物
↓ 大石田で そば打ち
↓ 秋田県角館 銀山温泉 仙台空港発

岩手—平泉観光(平安)

- 2011年世界遺産に登録
- 平安時代後期、平泉は陸奥の豪族藤原氏が三代にわたり統治していた奥州の中心地とされていた。
- 仏教の中でも浄土思想に基づいた多様な寺院・庭園及び遺跡がある。
- 外国人観光客が増加傾向にある。また、寺院では音声ガイドを貸し出しており日・英・中・韓国語に対応している。
- 男性の装束「狩衣」、女性の装束「小袷(こうちき)」体験可



秋田—角館宿泊 武家屋敷の観光(江戸)

- 国の重要伝統的建造物群保存地区
- 江戸時代の歴史ある武家屋敷が並ぶ、まさに「みちのくの小京都」と呼ばれる美しい風情を漂わせた観光名所。
- 「大森(ひがし)」と呼ばれる広場を中心に、北側は武家屋敷が建ち並ぶ「内町(うちまち)」、南側は町人や商人が住む「外町(とまち)」に区分された。
- 荷物の着付け可
- 人力車



銀山温泉—宿泊(大正)

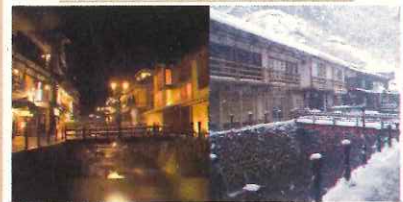
- 大正末期から昭和初期に建てられた洋風木造多層の旅館が銀山川の両岸に沿って軒を並べ、昔ながらの独特な景観を味わうことができる。
- NHKの連続テレビ小説『おしん』の舞台として一躍有名になった。
- ゆきの降らない時期は散策コースを楽しむことができる。
- 温泉街まで車が入らないので、都会の喧騒を忘れてその時代に入り込める。

上山(果樹狩り)

- とれいゆつばさに乗って上山まで
- 季節の果実を収穫体験
- 春から秋にかけて、サクランボ、モモ、ラ・フランス、ブドウなどが収穫できる。
- 日本の季節を感じるができる。



銀山温泉のPR動画



飯豊町 ～農家民宿～

IRORI囲み隊 柿崎愛瀬・山本吏保・澤木美佳・駒井美咲・白浜百華

飯豊町の農家民宿についての問題点

- ・後継者がいない
- ・交通の便が悪い
- ・民宿側からして宿泊料が安い＝利益が少ない
- ・PR力が足りない

→農家民食の実態を把握し、改善案を提案する!!

しかし、農家民宿としての利益を求めてない・・・

求めているのは飯豊町 全体の活性化



～考えた策～

1,民宿客の増加で
飯豊町を活性化!!

2,SNSを使ってPR!!

3,観光協会と
民宿との意識の
統一と連携!!

ご飯もおいしい!!人も優しい!!

(いいで)

みんな飯豊町にお飯豊～!!

IRORI囲み隊(男子グループ)

～山形県飯豊町 農家民宿調査～

メンバー 神 秀登 佐藤 健太 佐藤 克輝 猿田 周朔

目的：山形県飯豊町を活性化するために中津川地区にある農家民宿の実態を調査する

調査Ⅰ H28.11.26 農家民宿「庄太郎」と「中村」にインタビュー

- 結果・農家民宿全体で協力している
- ・海外からの宿泊客も多い
 - ・Wi-Fi完備
 - ・メインシーズン 5～6月、9～10月
 - ・後継者がいないのが現状

調査Ⅱ H29.1.14/15

農家民宿「中村」に宿泊

- 結果・熊肉、山菜を利用した地産地消の料理を頂いた
- ・豪雪地域での生活体験
 - ・マタギ*の貴重な話を聞いた

*マタギ・・・狩猟を生業とする人のこと



まとめ

- ・農家民宿は飯豊町の重要な観光資源である。
- ・農家民宿は経営黒字が目的になっていない。
- ・農家民宿を存続させるよりも、民宿を一つの手段として飯豊町に多くの人を呼び込み、一人でも多くの人に魅力を知ってもらうことが大切だと思った。

地方創生戦略Ⅱ拠点整備班

1. メンバー

佐々木 廉・大畑 慶祐・武者 采輝・大澤 愛永・吉田 小春・佐々木 直登・阿部 優美・山本 凜太郎・村越 勇希・大塚 唯・佐藤 光

2. はじめに

私たちは飯豊町に存在している空き家を利用して飯豊町の方々の生活を豊かにするものや活気を取り戻させるものを作るのではないかと考えアンケートとインタビューを行いました。

3. 一回目現地調査結果（インタビュー）

- ・やる前に空き家にも持ち主がいると思うので聞くべきだ（道中に会った80代夫婦）
- ・飲食店が少ないから、カフェなど
公民館以外に住人が交流できるような集会所
特産品を有効活用できるような簡易工場（40代飲食店店長）
- ・飯豊の遊び場不足→幅広い年齢が集まれる場所がない→結果違う街へ（にぎわい再現プロジェクト）
- ・飯豊に人を呼び込む策はある（例）カヌースクールなど（がまの湯）

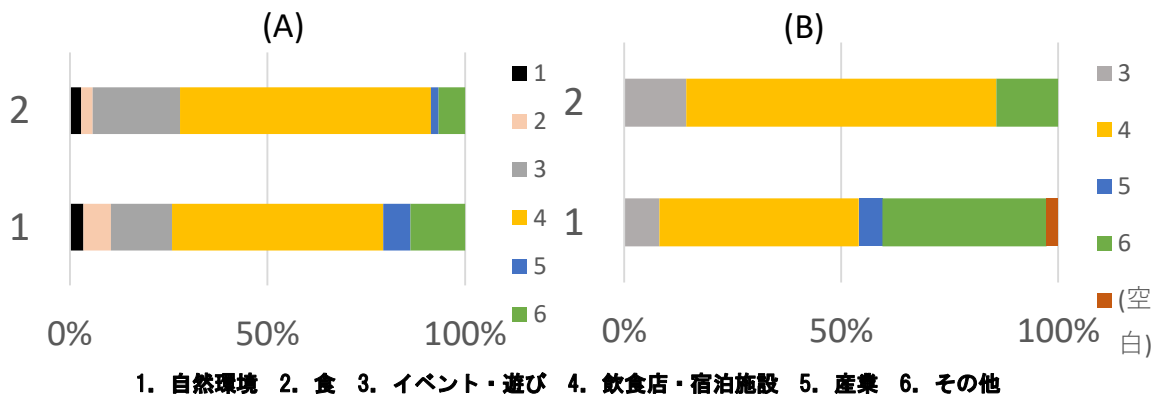
4. 二回目アンケート調査

一回目調査結果をもとに二回目調査は更に多くの人数の意見、幅広い年齢層を対象としたアンケートによる調査を行った。

アンケートでは空き家に関する質問を行い、それぞれがどのような意見を持っているかを集めた。

また、年齢による違いがあるのか、空き家を見たことがあるかないかで違いはあるのかという仮説を立てそれらを集計し、グラフ化してみた。

下グラフは(A)10代（飯豊中学校）、(B)20代以上（飯豊町役場）それぞれの人の（1）空き家を見たことがある人、（2）ない人の意見の違いを示す。



5. 結果

中学生・役場職員ともに飲食店・宿泊施設を望む意見が多く見られる。地元のものを使ったレストランやカフェ、居酒屋などの意見があった。

空き家を見たことがある人は産業についてやや多く述べており、米の加工場やゴミのリサイクル施設、IT企業の誘致など飯豊町を経済的に活気だてるような考えが多く見られた。

空き家を見たことがあるかないかで空き家の利活用について意見の違いがあることから、町全体で空き家の存在を知り、それらをどのように活用していくかを町全体で考えていく必要があると考えられる。そのためにも町民全員がこれらのアンケートにあるような意見を取り入れ、それらを作っていくような企画をたて、町民全員が参加することが問題解決に充てられると考える。



道の駅 いいで〜めざみの里〜

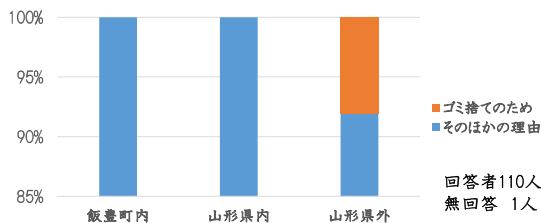
- ・道の駅「いいで」は新潟と宮城をむすぶ国道113号線の中に位置している。
- ・山形県内外でも有名な道の駅で県外からの観光客も多く訪れる。
- ・フードコートでは山形ならではのものが多く、観光物産展ではお土産品だけでなく野菜や果物も多く店内に並ぶ。

道の駅建設当初からごみ箱からあふれかえるくらいのごみに悩まされている。

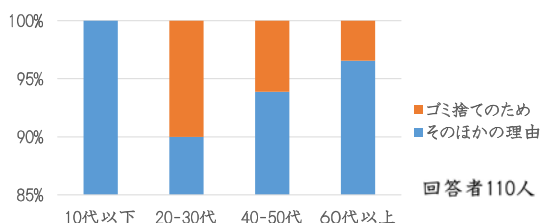
仮説

- ・ゴミ集積場が遠いからなのか？
- ・若い人のほうがゴミを捨てやすいのではないか？
- ・県外から来る人が休憩ついでにごみを捨てるのではないか？

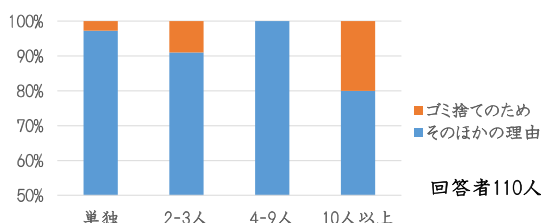
アンケート結果〜なぜここに来たか〜



アンケート結果〜なぜここに来たか〜



アンケート結果〜なぜここに来たか〜



アンケート結果から

- ・ゴミを捨てることを主な目的としてくる人は山形県外から来る人に多い。
- ・ゴミを捨てることを主な目的としてくる人は20-30代をピークとし、徐々に減っていく傾向がある。
- ・人数とゴミを捨てる人との関係はそれほど関係がないように見える。

ほかの地点との比較

◆コンビニ

- レジの横にごみ箱が設置してあった。
- コンビニのごみ箱にはごみが多く入ってなかった
- コンビニの裏の畑にごみが捨ててあった。

ほかの地点との比較

◆旅館

- 捨て猫を置いていく人がいた。
- 空き缶などのごみを置いていく人がいる。
- 近くのコンビニのごみを置いていく人もいる。

◆スーパー

- 入口に空き缶を入れるとお金がもらえる機械が置いてあった。
- トレーを入れるリサイクルボックスがあった。

道の駅社長へのインタビュー

- ・何年前からゴミが増え始めたのか→平成9年のオープン当初から
- ・1年を通してゴミが多い時期は→夏場。冬は少ない
- ・朝にゴミが増える原因として考えられることは
→観光バスが道の駅を利用し、その際に乗客が持ち込みゴミを捨てていくため
→深夜に商業ゴミが捨てられていたため(年に数回)
- ・対策として防犯カメラなどは設置しているか
→外部からのゴミを監視するための防犯カメラは設置していない

今回私たちは「ゴミ集積所が遠いため、道の駅でゴミが増えるのではないか」という仮説を立てた。実際に現地に行ってみて、ゴミ集積所が遠いことが原因ではなく、道の駅に立ち寄った際にゴミを捨てていく人が多数いることが原因であることが分かった。

フィールドワークを通して、現地に行くことで初めてわかることもあると知った。また、実際に話を聞くことで新たな改善策を立てられた。道の駅には若者からお年寄りまで幅広い年代の方が訪れる。そのため、どんな年代の方々も快適に過ごせる空間を作っていくことが重要であると考えた。



感想
ECOプロジェクト

道の駅ゴミ減らし隊感想

- ✓想像以上のごみの多さに驚いた。
- ✓道の駅いいでは張り紙だけの対策になっていたが、どの道の駅においても張り紙だけでは対策できていないため、改善すべき。客観的に見て対策が不十分であると感じた。
- ✓アンケートを行ったり社員さんのお話をお聞きしたりして、私たちのような大学生が問題の原因になっていることを知り、このような問題があることを同世代に人たちに私たちが広めて問題の解決に尽力したいと思った。

飯豊町で雪遊びしてみませんか？

～都会では決して見ることもできないたくさんの雪に囲まれ友達とたのしみましょう！～

山形県の飯豊町というところを知っていますか？山形市から車で小1時間のところに位置するのですが、訪れる観光客が少なく知名度の低い町なのです。そんな飯豊町の魅力の一つを私たちが紹介します。



飯豊町は、冬場の降雪量がとにかくすごく、どんでん平スノーパークではたくさんの雪に囲まれて雪遊びをすることができます。雪合戦、かまぐらのような遊びに加えて、スノーモービルや雪上バナナ

ボート、巨大滑り台などのような普段では楽しめないような遊びも体験することができます。私たちは、ストラックアウトも体験させていただきました。



私はあまりやったことが無かったのですが十分楽しめました・・・当たらなかったけども

こんな感じでみなさんも雪で思い出作りしませんか？また近くには温泉もあるので疲れ、冷えた体を温めるのも最高です。是非行ってみてください！



僕は、神奈川出身でこんな雪は初めてだったので雪にダイブしました。チョーたのしーー
ぼくたちが行った施設はここ！
どんでん平スノーパーク→山形県西置賜郡飯豊町大字萩生 3341
がまの湯温泉いいで旅館→山形県西置賜郡西置賜郡飯豊町椿 4
4 9 4

과문힐 정도의 눈으로 놀아 보지 않겠습니까?

굉장히 차가워지고 있는 눈인데도 추위 잊어서 모두 웃는 얼굴



많이 눈이 내리는 여기 이이테마치에서는, 등산객이나 관광객, 수학 여행생등이 오고 있습니다.이이테마치에는 겨울에는 눈이 쌓입니다.거기서 눈장난을 해 보지 않겠습니까?이이테마치에는 눈으로 놀기 위한 장소가 얼마든지 있습니다.그런 매력적인 이이테마치를 모르는 사람이 많이 있습니다. 그 중에서도 스노모빌이나 바나나 보트, 거대 미끄럼대등이 있는 것은, 또 그리고 응평스노우 파크입니다.여러분도 과문힐 정도로의 눈에 다이브 합시다.

명칭

いいでどんでん平スノーパーク

■소재지

山形県西置賜郡飯豊町大字萩生 3341

■전화번호

0238-86-2411

SNOW ACTION 班

動画紹介

メンバー

高橋興平、一刀皋平、川上大地、松田智宏

動画は Youtube にアップされています。

URL : <https://www.youtube.com/watch?v=BgCGermRzng&feature=youtu.be>

QR コード :





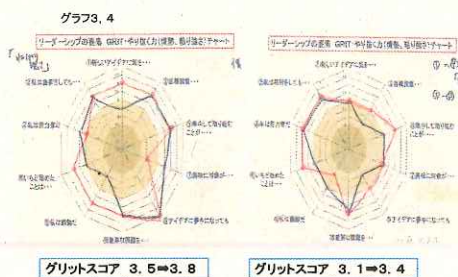
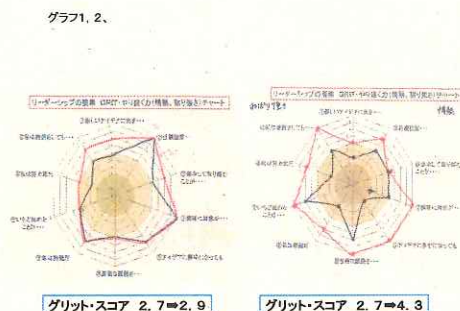
リーダーシップ入門2
(地域魅力発見バスツアー)

目的・狙い

- ・地域で活躍しているリーダーを訪ね対話や議論を通して山形の魅力を探る。
- ・山形の企業やリーダーの魅力を発見し、山形に就職する学生を増やす。

授業を通した学生の変化

スタート時はどきどきしない学生だったが、中盤ごろから積極的な主体的に授業を引っ張り、最後はリーダーと進め方の話し合いや工場見学などの時間配分など学生が行った。学生の声として「山形＝田舎＝衰退」というイメージが払しょくされた、自分発見の旅だった、働くことはカッコいいなど成長した姿を見せてくれた。

[illegible]

感想①

感想(学んだこと、参考になったこと)を3つに
まとめてください

[illegible][illegible][illegible]

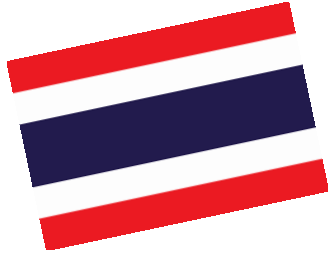
満足度

満足度調査

⑤大満足 9
④満足 1
③普通

⑤大満足の学生の意見
学生と企業の距離がより一層近づくような講義で非常に有意義な機会でした

④満足の学生の意見
学生主体と言いながら形だけの参加になっているところがあったように感じられる。



コンサック ラッシャニーゴン 「タイ」
山形大学



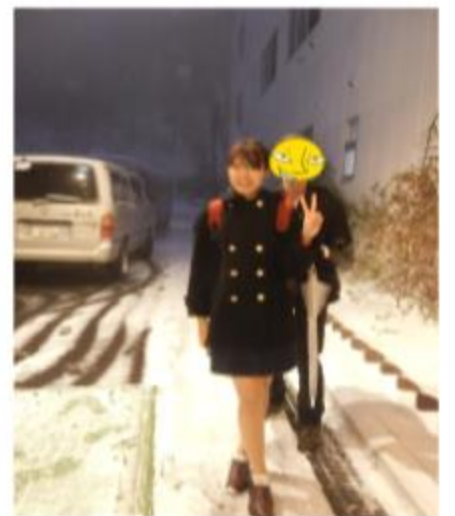
私はそのころ様々なことを心配していました。文化が全然違うので、外国の生活に慣れることができるかどうか、友達ができるかどうか、外国人と話すとき聞き取れるかどうかなどを心配していました。それまで、外国人の友達もいなかったからです。でも、今は私の生活が変わりました。

まず、毎週、日本の文化の授業があって、他の留学生と時間を過ごしました。知らない間に友達がたくさんできて、親しくなっていました。私たちは様々な日本文化を学びました。日本文化は本当に面白いです。私が一番大好きなのは着物です。



それから、日本文化を学ぶだけではなく、私たちが自分の国の文化も紹介しました。先月、国際交流コンサートを行いました。そのイベントで皆が自分の国の文化を紹介しました。私もタイダンスをおどりやりました。日本人と外国人から喜んでもらって、嬉しかったです。

日本に来てから、今、5ヶ月が経ちに立ちました。私は毎日本当に幸せです。日本の生活は慣れてきました。今から、日本でのいい経験になるように、もっと積極的に活動に参加して行きたいです。タイに帰っても、絶対にこの経験を忘れません。



Spring

Summer

花見

人間将棋

そば作り

村山

着物経験

伝統音楽

料理作り

多文化交流

autumn

winter

この1年は、ただ勉強のためではなく、日本を感じる大事な時間でした
山形の自然、日本の伝統、人々の交流で理解した世界の文化。
見て、聞いて、感じて、やってみたこの大切な1年をみなさんにご紹介します

大人から若者たちへ 若者から大人たちへ

大学を卒業し、地元で働く、やりがいやいきがい、「地域づくり」を通して学生から社会人への現実を知る。

先輩たちの足跡から学ぶことは多いはず。仕事人は若い人の意識を知り自分を振り返り、両者にとっていい体験の場になる。

10・27「地域づくりって」第1弾

“地域づくりあるある”からテーマを掘り下げる。



11・17「地域づくりって」第2弾

山形市都市計画マスタープラン見直しから、
山形市の未来を見つめる。



12・7「地域づくりって」第3弾

リノベの実態からまちづくりの可能性を見る。



1・20「地域づくりって」第4弾

これから山形市の学生が考えるべき未来を見据える。



「地域づくりって」第5弾

2月25日(土) 19:00～ BOTA coffee 2F

若者から大人たちへの伝言

これまでのすべてがここに一杯詰まっています

NPO 法人まちづくり山形

村中秀郎 TEL 023-679-3301 携帯 090-4244-2255

Eメール matidukuri-yamagata@nifty.com

やまがた社会貢献基金協働助成事業の支援を受けて実施
山形大学COC+事業と連携

5回の「リアル体験」と1・17 報告会

まちづくりの現場を体験する。





IVYyouth とは

IVYyouth（アイビーユース）は東北での国際活動の活性化と若者の経験の幅を広げることとを目的に2010年に設立された「認定NPO法人IVY」を母体に活動する若手組織です。山形・仙台を中心に東北各地の若者がメンバーとなりカンボジアの小学生のための算数教育支援や国際理解教育のためのワークショップを行っています。

カンボジア算数教育支援プロジェクト



現地の先生と打ち合わせ



ドリル支援を通して小学生の算数学力を向上させ 農業に生かし将来的な貧困を削減することが目標です



国際理解・環境教育



地球子供キャンプ



他団体との交流



中学校でのワークショップ

カンボジアの子供たちのために、オリジナルの算数ドリルを作り、現地の届けに行っています。教育支援に必要な情報の調査も行なっています。

小学生を対象に国際理解教育のワークショップや学習会、環境やグローバルなことに関するイベントを主催しています。

連絡先



@IVYtouth1



IVYyouth



ivy_youth@yahoo.com



認定 NPO 法人 IVY
Approved Specified Non-Profit Organization IVY

Y

U

M

YUM!(ヤム)は山形大学広報部として、
大学の”いま”を学生目線で伝えています。
私たちと一緒に山大をアピールしませんか？



サークル取材



キャンパスライフ



教授インタビュー



講義紹介

新メンバー、募集中

YUM!!山形大学マガジン

理学部棟横・インフォメーションセンター隣にて

毎週火曜日16:30～活動中

取材依頼・入部希望などMAILよりご連絡ください♪

HP:<http://www.yamagata-university.jp/>

MAIL: yum_yamagatamagazine@yahoo.co.jp

THIS →





山形にいながらも異文化を体験したい！
もっと留学生と交流する場が欲しい！
日本人学生と留学生が交流する一歩となるような
機会を作りたい！
そんな思いを持った学生が集まったサークルです。

月に一回、お花見やスポーツ大会、
ハロウィンやクリスマスパーティーなどの
イベントを通して国際交流をしています。



IF (International Friendship)

山形大学 国際交流サークル



【 留学生出身国 】

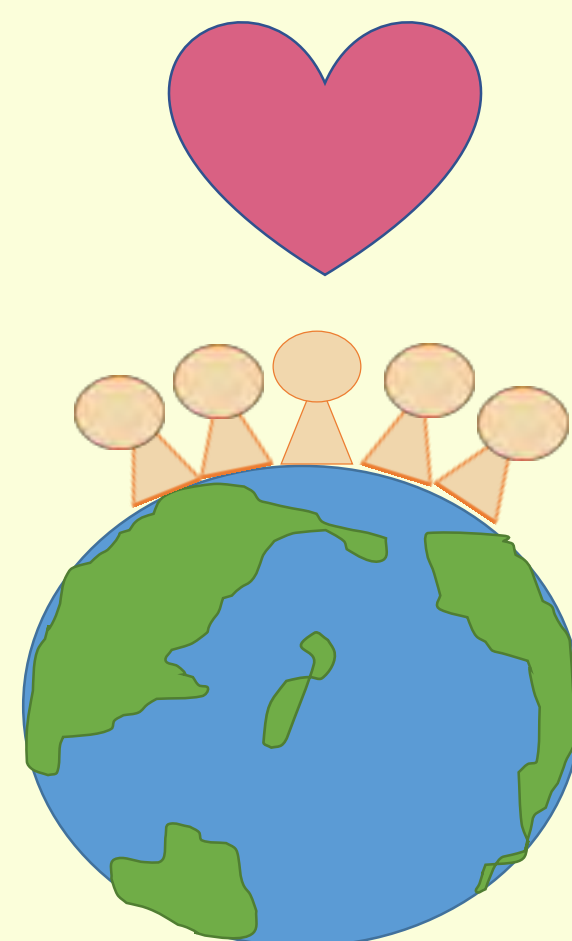
- ・アメリカ
- ・カナダ
- ・ロシア
- ・韓国
- ・台湾
- ・ラトビア
- ・ブルネイ …etc

山形大学では世界中の留学生と
交流することができます！



【 連絡先 】

山形大学国際交流サークル
IF (International Friendship)
代表 : 羽田春香
✉ : if.yamagata2016@gmail.com



Agasuke House Project

Back Ground

国際交流、海外での経験



山形の魅力に気づく



自分たちで発信していくために何ができるか。



Agasuke House Project

活動実績

- ・クラウドファンディング達成(65万)
- ・セルフリノベーション実施
- ・山形大学学長会見登壇
- ・高大連携事業実施



Agasuke Houseの効果

- ・若者が活躍する場が出来る
- ・インバウンド観光促進
- ・地方創生
- ・教育の充実化
- ・空き家問題の解消

Agasuke Houseのこれからの課題

- ・運営資金の確保
- ・プロジェクトメンバーを増やす

問合わせ: agasukehouse@gmail.com

山形大学東北創生研究所と研究

※ 東北創生研究所の概要

東北創生研究所は、今まで積み上げてきた山形大学の知恵を集中し、自立分散型社会のしくみと、その基盤になる新たな社会づくり、産業づくりに取り組むため、平成24年1月1日に設立されました。

現在、山形大学の全学部（人文学部・地域教育文化学部・医学部・理学部・工学部・農学部）全大学院（社会文化システム研究科・地域教育文化研究科・医学系研究科・理工学研究科・農学研究科・教育実践研究科）が連携し総合的な研究を行っています。

また、本研究所では、「社会創生研究部門」「産業構造研究部門」「食料生産研究部門」の3つの部門を設けて様々な研究を進めています。主な研究は次のとおりです。



東北創生研究所

※ 現在取り組んでいる主な研究

- 1 ICT利用による地域コミュニティ再生の研究 **（社会創生研究部門研究）**
- 2 排雪を利用した雪冷房システム構築に関する研究 **（産業構造研究部門研究）**
- 3 廃校利用による農産物生産システムの研究 **（食料生産研究部門研究）**
- 4 畜産業の臭気問題に対する総合的対応策の研究 — 養豚場の建設に伴う臭気対策の構築 — **（プロジェクト研究）**
- 5 高齢者を取り巻く諸環境の整備に関する総合的研究 — 少子高齢化孤立社会の解決方法 — **（プロジェクト研究）**
- 6 耕作放棄地の有効利用に関する研究 — クルミ・キハダ・紅花・落花生等による植物資源の多面的利用 — **（プロジェクト研究）**
- 7 再生可能エネルギーの創造と有効活用方法の構築に関する研究 — バイナリー発電・小規模水力発電を中心とした実証実験 — **（プロジェクト研究）**
- 8 ICTを利用した地域づくり研究 **（共同研究）**
- 9 最上峡における観光資源開発とサービス戦略展開に関する研究 **（共同研究）**
- 10 長井市における地域食材波及の展開に関する研究 **（共同研究）**
- 11 多世代に対応できる余暇空間構築に関する総合的研究 **（共同研究）**
- 12 豪雪地帯・過疎地域における農作物栽培による冬期・高齢者向け廃校利用システム構築に関する研究 **（共同研究）**



山形市高瀬地区の紅花娘と山形大学の学生
（山形市高瀬地区にて）

※ これからも、東北創生研究所は、自立分散型社会のしくみと、その基盤になる新たな社会づくり、産業づくりに取り組んでいます。

平成 27 年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」
協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業

平成 28 年度成果報告書

平成 29 年 3 月発行

発行者 国立大学法人山形大学

〒990-8560 山形市小白川町一丁目 4 番 12 号

印刷所 藤庄印刷株式会社